

提 言

「母子保健」に対する理解

衛藤 隆 (日本小児保健協会会長)

小児科臨床医, 国立公衆衛生院での研究生活を経て東京大学教育学部にて教壇に立つようになり14年度目を迎えた。保健医療に全く職業的にかかわらない領域の学生を対象に「健康管理論」, 「社会生活と健康」等の講義・演習を行っている。おそらくよく勉強してきたと思われる学生から「母子保健」という概念に初めて出会い戸惑いを覚えたという印象を語られることが時々ある。「何故, 今時『母子』なのか? 父親の育児参加の重要性も指摘されているのだから『父子保健』がないのはおかしいのではないか。」というようなことも言われる。「母と子の一貫した健康管理が大切であり, 歴史的にもその意義は確かめられてきたし, 世界的も Maternal and Child Health という領域が確立しているのだけど……」と説明するのだが, 何となく咬み合っていないと感じる次第である。乳児死亡率が世界でも最低レベルを維持し, 母子健康手帳の普及や妊産婦や乳幼児の保健管理システムが築きあげられている現実を若い人々にきちんと理解してもらえていないことを歯がゆく感ずる。ジェンダーについての理解が進み, 社会生活をする上での考え方が幅広くなってきたことは歓迎すべきことであるが, それは「母子保健」というシステムについての理解を阻むことにつながってしまうのだろうか。根源的には基本的な知識が不足しているのではないかと思う次第である。

中央教育審議会を通じ, 教育課程のあり方の検討に加わる等, 教育改革に関わる機会をここ数年もってきた。初等中等教育を終えた段階で何をどれだけ習得したかが明らかとなるよう内容を検討することを求められた。保健体育でもそのような観点で議論した。最終的に完成した学習指導要領では総則に大幅に記述が加えられ, 個々の教科の内容に関しても様々な工夫が施された。小学校第3学年から高等学校第2学年まで, 系統的に保健が学習されれば, 社会人として暮らす上での健康に関する知識と活用能力はかなり身につくことが期待される。すべての人々が自分自身や家族の健康や安全に関し適切な知識をもち, 自信をもって活用できるようにすることは大切なことである。このようなヘルスリテラシーを高めることに健康教育がどのように寄与すべきかが私たちの課題である。



モシモシの練習中…… 写真提供 衛藤久美